



発行  
NPO法人いわむら一斎塾  
事務局 江戸城下町の館  
〒509-7403  
岐阜県恵那市岩村町317  
TEL 0573-43-5087

士は当に己に在る者を持つべし。動天驚地極大の事業も、亦都て一己より締造す。

(言志後録一一九条)

釈意

志を持った男子たる者は、自身自身にあるところのもの(自分が生まれきたことの意味)を思い、そのところを考へるべきであり、他にたよつてはならない。天や地を動かすような大事業でも、すべて自分自身の使命として、自ら造り出すものである。

一人びとり生れきた以上、使命(役割)をもっている。その役割は他と比較するものではない。自らの誇りとして志の核として進むべきである。近時の世相は、他と比較してしまうことが多い。自らの使命を自覚して、その本意をもって生きる人があまりに少ないことを思うにあたり、自らの心の中から湧き上つて来るもの、釈尊が心を育てる基本として「自灯明、法灯明」といわれたように、解決の糸口は自らの心の中にすべてがある。

徳増省允

佐藤一斎の学びの真髄  
— 疑うということ —

東洋大学教授 吉田 公平

「疑う」の反対概念は「信ずる」である。「信ずる」ことは陽気な印象を与えるのに、「疑う」ことは暗い陰性な雰囲気をもし出す、そのような語感につきまとう。一旦、容疑者・嫌疑者とみなされると、半ば犯人扱いされる。しかし、「信ずる」ということにも、狂信者・妄信者という語彙があるように、「信ずる」ことの全部が全部、プラス価値を示すわけではない。「信ずる」ことと「疑う」ことは、実際の現場では、何をどのように、どの程度に信ずるか疑うか、となると、単純に対立するもの、割り切ることが出来ない。信じながらも疑う気持ちを払拭できない。あるいは疑いながらも、信じたいという心情に置かれることがしばしばある。

佐藤一斎さんは、『言志晩録』

五九條で、とても興味深い言葉を残している。

わたしは若いときに、学ぶにつれて疑問をいだく機会が多かった。中年になってもそうでした。疑問が一つ起る度に、自分の理解がすこし進歩したのを実感しました。ところが、近年は疑問を覚えることが全くなかったのです。そのせいで、学びも進歩しなくなつたのを実感します。そこで始めて、(中国・明代の)陳白沙さんが「疑うということ」がすっかり分かる(覚悟)契機なのです」といわれたことを確信しました。人間らしく生きる道(斯道)にはこれで完結すると言うことはありませんが、わたしたちの学びにもこれで窮め尽くしたというつもりはないのです。今やわたしは年老いはしましたが、これからも自分を励まし励まし生きていきます。(原漢文)

学びには、学習と学問の二通りがある。学習とは『論語』の冒頭にある「学んで時に習う」を出典とする。既存の知識や技術を繰り返し訓練して身につけること。生活者と生き延びるために、不可欠の学びである。小学校・中学校・高等学校で学ぶことは、基本的にはこの学習である。学校教育の場を離れた後に、一市民としてあるいは一職業者として、必要に迫られて、課せられた役目を果たす為、わたしたちは常にこの「学習」を繰り返している。そうしないと日常生活がスムーズに展開しない。この学習の一つの特色はとりあえずの正解があることである。

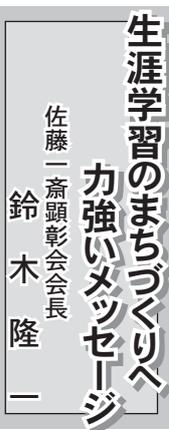
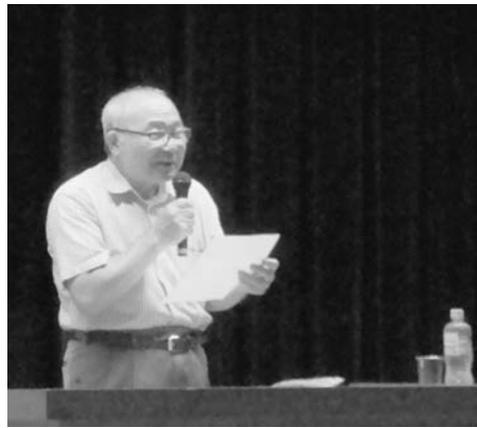
学びのもう一つに学問がある。『孟子』の「学問の道は他なし。その放心を求むるのみ」を出典とする。『中庸』には「問学」とあるが「学問」と同義である。見失っている人間性を回復すること、それが学問の道だといっているのである。この場合の「学問」とは「学びて問う」。あるいは「問うことを学ぶ」こと。学習することを期待されている内容や方法を、あらかじめ問い直すことである。だから学問は学習を前提にする。そのうえで一旦は学習した内容を問い直してみる。かつて学んだことを、ほんとにそうなのか。またはそれ

を現在に生きる自分たちにとって、そのまま受け止めてよいものかどうかと。それは誰もが一人の人間として、真つ当に生きてみんなと共に幸福でありたいと願うからである。学問とは一部の研究者が独占的に行うものではない。生活者なら日常生活の中で無意識のうちに行っていることなのである。

ただそれが「学問」の本義だとは自覚していないだけのことである。佐藤一斎が「疑うは覚悟に機なり」（疑うということがすっきり分かる〈覚悟〉の契機なのです）という陳白沙の言葉を引用しているのは、自分らしく生きるためには、既成の価値観や知識・情報を鵜呑みにするのではなくして、ひとまず「疑う」という契機を設けて、今に生きる自分にとって、意味があるのか否か、あるとすればどのような価値があるのかを、人任せにせずに、自分なりに自前で考えること、そのことがその人の生活を確かな、豊かなものにする

ことを言いたかったのに違いない。現今、高度情報化社会という。情報量が飛躍的に多くなったばかりではない。その情報の伝達速度も加速された。わたしたちは情報の海に翻弄されている。それだけに「疑う」ことが今こそ肝心である。と

はいえ、一人で何もかも処理することはとても出来ない。信頼できる仲間と学びあうことが、我々の負担を軽減して、学ぶことの喜びを満喫させてくれるのではないか。



いよいよ恵那市では、生涯学習によるまちづくりが始まりました。詳しいことは「広報えな」(No. 一二七)(五月号)に譲り、どうしてもある人のお話をこの紙面をお借りして紹介させていただきます。

〔今日は、佐藤一斎翁の歿後百五十年祭ですが、これからはこの地域だけでなく岐阜全体でも、

小・中・高等学校で、佐藤一斎というこの地に縁がある偉大な学者がいたこと、そしてこれからの人間の修養に役立つ言葉を噛みしめる教育をするということが極めて大事だと思っております。

佐藤一斎は安政六年(一八五九)九月に亡くなりましたが、この同じ年に亡くなったもう一人の仁(じん)がいます。それは、吉田松陰です。佐藤一斎は九月に亡くなりましたが吉田松陰は十月です。江戸で処刑されました。わずか二十九歳。佐藤一斎は八十八歳の天寿を全うされましたが対照的に吉田松陰は二十九歳で命を絶たれました。共に亡くなりましたが、生きている人たちに大きな影響を与えた偉人です。

まさに世の中は生きている人だけで形成されているものではありません。『死者が生きている人たちを動かす』という言葉がありましたが、こういう偉人の生き方、書を読んで多くの人たちが発奮し世の中をよくしようと立ち上がったこと、そのことを銘記しなくてはなりません。そういう意味で、我々は読書から大いに学ぶことができるといふことを示していると思います。

人間は何百年前の、何千年前の人の書物を読むことによって、歴

史上の偉人と付き合いができます。また、自分を高めることができます。だからこそ読書というのはいへん大事だと考えております。

私は佐藤一斎を知らなかったら、学ぶことの大切さがいかに重要か、また、楽しいかということも分らなかったのではないかと思います。私の家には佐藤一斎のカレンダーがあります。言志四録の良いところが書いてある。毎朝起きるとこれをめくって、ああ今日もこういう気持ちで大事だなと。

あるいは『春風をもって人に接し、秋霜をもって自ら肅す』。これは私の好きな言葉です。全部は書けないので、色紙を人に頼まれます。『春風接人』とだけ書きます。つぎに続く言葉はなかなか難しいですね。春風のようにやさしく人に接して、秋の霜、秋霜をもって自らつつしむ：これはなかなか出来ないことなんです。自分には温かく接して、人には厳しく接してしまうのが人間ですからね。この佐藤一斎の言葉を見ながら、常に反省をしながらこの言葉を肝に銘じて、色紙に揮毫するわけです。最近ようやくわかってきました。いい言葉というのは後になって何回読んでも感じ方がうんですね。

特に、最近、佐藤一斎の言葉』少

くして学べば、壮にして為す有り。』若いときに学べば壮年になって、大人になって有為な人材になれる。『壮にして学べば、老いて衰えず。』大人になって、壮年になって学べば歳をとっても衰えない。今、私が好きなのはこの次の言葉なんです。『老いて学べば、死して朽ちず。』私も政界を引退して、還暦も過ぎてもうじき七十になる。老いて学べば死んでも腐らない。いい言葉だと思つてますね。

私はこれからも益々この読書なり学びを楽しもうと思つております。

子どもを教えるということは大人も教えるということです。大人が学ぶということは子どもも学ぶということです。

教育に終わりはない。学びに終わりはない。そして学べば精神は腐らないという佐藤一斎の言葉を大事にして、教育の重要性のために大いに先輩の皆さんが頑張つていただきたいと思います。」

昨年十月二十四日に行われた言志祭における小泉元首相のご挨拶です。

こうして活字として残し、多くの方の目に触れることも大切と思ひ紹介させていただきました。

## 生誕一五〇年を迎える 三好学

「私の幼年の時は旧藩の領邑美濃の岩村に居た。この屋敷は明治維新の際拙家が江戸の藩邸内から引越して来た時旧藩主から拝領したもので、城山の麓の熊洞といふ寂しい谷間にあつた。門外の溪流に架した土橋を渡つて山中に入ると、山櫻が生え、花時には能く遊びに行つた。幼少の時、はつきりした記憶はないが、櫻に就ての最初の印象を得たのは此頃であつたかと思ふ。」(三好學著「櫻」富山房発行 序文より)

今は家もなく荒地に近い畑になつているこの地に立つと、学の幼年時代が彷彿として蘇るようだ。

のちに櫻や花菖蒲の研究で世界的に名前を馳せ、また、日本の天然記念物保護の法制化の先駆者として各方面へ働きかけた三好学は、文久元(一八六一)年十二月五日に生まれ、来年は生誕一五〇年を迎える。

平成十六年、城址公園に三好学の銅像が建てられたものの、知る限りでは彼の業績を広く紹介し顕彰した記録はない。

地球規模で待たなしの環境悪化が憂慮されているなか、「環境があつてそこに人間が存する」との三好学の言葉をテーマに、来年は「三好学顕彰年」にし、多くの人と学び合ひ、訓えを今に活かしたいものです。

## 言志四録抄録によせて

世良田 嵩

今から振り返つてみれば、「言志録」との出会いが昭和五十年代の後半だったように思われます。それまでの小生にとって、学校で学んだ論語をぜひ味わつてみたいとは思つていましたが、学習参考書にてでくるような論語ばかりでした。川上正光先生訳の「言志録」に出会つたとたん、非常に簡明にして力強い文章に魅せられました。早くに両親を亡くした小生にとって素晴らしい心の宝石を随所に見つけました。今でもその感激を忘れることは出来ません。しばらくして、安岡正篤先生の著作に出会い、ここでも「言志録」についてその内容の深さに驚きました。縁あつて論語の素読会で伊與田覚先生の「仮名論語」に出会い、先生直々の講義に十年間もの間参加することが出来、論語全編を学んだことは私の一生の宝となりました。その中で易学についての考え方についても接し、佐藤一斎先生が易学の大家であることも知りました。ゆくゆくは「易学欄外書」を読みたいと今も心に秘めています。

小生にとって、「言志四録」の簡易で力強い言葉を心ある人々が

身近に読めるような書物が見当たることがなかったので、素読用の仮名論語のような本が出来ればいいなあと常々考えておりました。義母に相談しましたところ、快く浄書を引き受けてくれました。また、訳文については川上正光先生の口語訳を考えておりましたが、著作権の関係で使用許可がいただけず月日が流れてしまいました。このままでは小生の夢が実現できずに終わつてしまいそうなので、伊與田覚先生に力添えをお願い申し上げて、渡邊五郎三郎先生に引き合わせていただき訳文をお願いしましたところ、快諾していただきました。高齡にも関わらず、多忙な中を早朝より取り組んでいただいて現代語訳をつけていただきましたことは心より頭が下がる思いで、感謝の念に耐えません。また、出版については明德出版社の佐久間保行氏に大変お世話になりました。このようにして道縁により出来上がった「言志四録抄録」が一人でも多くの方々にお役に立つことを心より願っております。

平成二十二年四月十日



# 感謝

会員 西尾 浩子

「暑さ寒さも彼岸迄」と先人曰く。ようやく秋色深まり、岩村の山々も美しくなります。

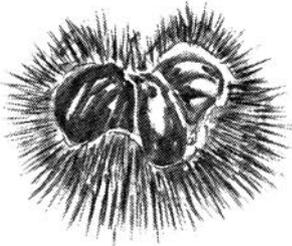
佐藤一斎先生の教えを一斎会で学びはじめてずいぶん年数が経過しましたが、まずありがたさでいっぱいです。

リーダーに恵まれ、同志に恵まれさまざまな体験が出来、各界の大先生の講議も受け、お墓参りに東京旅行したり、高遠、伊勢へも資料検分に出かけたり、結構楽しい事もありました。

「三学」「清きものは」「順境は春の如し」とすばらしい歌を歌う事も出来、自分なりに逆境にあっても強い身体と精神力があれば、乗り切れると思えました。

毎月一斎会で学ぶ教えは、人の道だと思いますが、実行が今いちです。

空気も良く環境に恵まれた、郷土岩村町で、一斎先生の教えを学べる事を、幸せに思っております。



# お知らせ

「その二」今後の特別講座

\*十一月二十日(土)

午後三時〜文化センター

演題「佐藤一斎『言志四録』」

・今を生ききる三学の精神

講師 窪田哲夫氏

(言志四録普及大使)

\*平成二十三年一月十五日(土)

午後一時三十分〜岩村公民館

演題「生涯学習社会に佐藤一斎の教えを活かす」

講師 上寺康司先生

(福岡工業大学教授)

皆さんのおいでをお待ちしております。

## 「その二」

今話題となっている電子書籍へ目を向け、「おじいちゃんとおぼく」

佐藤一斎さんからの伝言を、

iphone、ipadで購読できるようにデジタル化を行いました。

画面に表示されるカレンダーの日付を指で押すと、一斎さんからの伝言が表示されるようになっております。

機器がまだまだ高価ですが、機会があれば手に取って体験してみ

て下さい。

## 「その三」 「言志四録」 講読会

毎月第二土曜日午後七時三十分

から岩村公民館で。

平成八年七月にスタートした講

読会がこの十月で一五九回目を迎

え、ようやく「言志後録」を読み

終えました。

十一月十三日からは、いよいよ

晩録です。一斎先生の円熟の境に

達した文章にどっぷりと浸かり、

よくよく味わって行く楽しみは格

別です。

皆さんの参加をお待ちしております。

## 一斎塾が紹介する書籍

・言志四録抄録彫板

名言録集

五百円

・おじいちゃんとおぼく

千五十円

・言志四録抄日捲り

七百円

・大人の寺子屋

六百円

・生き方ルネッサンス

六百円

・佐藤一斎の思想

二千六十円

・佐藤一斎

三百円

・下田歌子著

女子の修養(現代語訳) 七百円



## NPO法人「いわむら一斎塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一斎翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

## 【お詫びと訂正】

塾報第八号一頁に掲載しました上田藤市郎様の漢詩の中で誤りがありましたのでお詫びして訂正させていただきます。

一行目(誤) 硯 ↓ (正) 硯

八行目(誤) 居 ↓ (正) 君

## あとがき

早いもので本塾報も第九号の発行となりました。今回はご多忙の中、吉田先生、世良田様に寄稿にご協力頂きまして感謝申し上げます。

各先生方、そして各会員様にもいろいろな行事の重なる中、快く寄稿下さいました事に感謝でございます。この塾報をより良いものにしていく為に皆様のご意見をお聞かせ下さればと願っております。